

平成22年 5月24日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20730527

研究課題名（和文） 文化戦争以降の米国歴史教科書におけるジェンダー概念と社会統合の論理に関する研究

研究課題名（英文） Concept of Gender and Logic of Social Integration as Demonstrated in U.S. History Textbooks since the Culture Wars

研究代表者

岡本 智周（OKAMOTO TOMOCHIKA）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：60318863

研究成果の概要（和文）：

本研究は、文化戦争以降のアメリカ合衆国の歴史教育の内容を把握し、1960年代以降に女性が獲得した社会や家庭での新たな役割がそこにどのように表現されているのかを探索した。1980年代以降の主要な歴史教科書の内容をデータベース化し、とくにバックラッシュ以降のジェンダー概念の扱いを分析した。アメリカの歴史教科書が次第に、社会的カテゴリーに付与された意味を吟味させる語り口を採用するようになったことを提示し、そうした語り口に教育的知識としての有効性を指摘することとなった。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to understand (through textbooks) the contents of history education in the United States after the Culture Wars, and to explore the expression of the new roles that women have acquired since the 1960s at the societal as well as domestic levels. After recording the contents of typical history textbooks after the 1980s in a database, we conducted a survey to analyze the post-backlash concept of gender. The results of this analysis conclude that U.S. history textbooks have gradually adopted a discourse of examining and reviewing meanings that have been attached to social categories; the results also indicate the effectiveness of this discourse as educational knowledge.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総 計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：アメリカ、歴史教育、歴史教科書、文化戦争、ジェンダー、社会統合、フェミニズム、バックラッシュ

1. 研究開始当初の背景

アメリカ社会においては多文化主義に依

拠する教育（multicultural education）が1960年代から取り組まれるようになり、社会

に生きる人びとの多様性を認知、擁護したうえで不平等を克服する力を生み出してきた。それは「エスニシティ」や「ジェンダー」のみならず「障害」や「老い」の面での差異を視野に入れた思想であった。しかし 1980 年代以降、社会的価値の相対化による国民社会の「分裂」が危惧されるようになり、多文化主義への批判が掲げられるようにもなった。1980 年代から 1990 年代にかけて争われた「文化戦争」は、「多様性を尊重する多文化主義思想」と「社会の凝集性を重視する保守主義思想」との相克であり、アメリカの教育教材の内容や教育現場における実践は、その対立を少なからず反映することになった。多様性と凝集性の相容れなさは、多文化社会における争点そのものとなり、また社会科学においてはそれを克服する論理の導出が重要な論題の 1 つとなっている。

申請者は 2001 年度以来 3 件の科学研究費課題を通して、この論題に関連する研究を進めてきた。そこでは主に 2 種の作業を行っており、第 1 には 20 世紀後半から現在に至るまでの歴史教科書を収集し、そこに表現される社会統合の論理の変遷を分析することによって、多文化的社会状況の評価のされ方の推移を提示してきた。第 2 には、マイノリティの側に聞き取り調査を行うことにより、多文化教育を受けた世代が、マイノリティとして帰属する部分社会とアメリカという全体社会とをどのように結び付けているのかを分析してきた。とりわけ 2006～2007 年度に行った科学研究費研究では、21 世紀に入ってから教育内容が採用している、社会の多様性と凝集性を同時に満たそうとする論理を析出することができ、多文化社会論の新たな展開を示すことができた。

ただしこれまでの申請者の研究は、教育による多文化社会の統合という現象を主としてエスニシティの面から考察するものであった。今回の申請課題ではジェンダーの観点から同様の検討を行い、この論題の複合的な探索への寄与を意図している。というのも、「文化戦争」の争点は、1960 年代以降に女性が獲得した社会や家庭での新たな役割に関しても及んでおり、スーザン・ファルーディの『バックラッシュ』(原著 1991 年)が描き出したように、そこではジェンダー間の平等という理念に保守主義からの批判が向けられたからである。しかしそのような揺り戻しの後にもなお、アメリカ社会における女性の社会進出は一般化し、また家族の形態も変化し続けている。Ann Diller や Barbara Houston らが *The Gender Question in Education: Theory, Pedagogy, and Politics* (1996 年)でまとめたように、現在の教育におけるジェンダー問題の可視化や、その解消のための具体的な取り組みも継続されている。本研究は

そこで、「文化戦争」を経た 1990 年代以降のアメリカの教育においてジェンダー問題がどのように扱われ、社会の多様性を尊重する思想と凝集性を重視する思想の相克と止揚がいかに関与しているのかを分析しようとするものである。

2. 研究の目的

(1) 2008～2009 年度の間に、①1990 年代以降に刊行されたアメリカの歴史教科書の内容を、先行研究が指摘した 1980 年代の教科書の特徴と比較分析すること、②文化戦争以降の歴史教育の動向について、とくに「多様性を尊重する多文化主義思想」と「社会の凝集性を重視する保守主義思想」との相克と止揚の観点から探索すること、の 2 つを研究の大きな柱とした。

①の課題についてはさらに 2 つの検討のポイントを設定している。その第 1 は、女性の社会的諸権利の拡張に伴って為されるようになったジェンダーバイアスを解消するための取り組みが、現在のアメリカの教科書が提示する歴史像にどのような影響を与えているのか、すなわちアメリカ史として描かれる出来事の中にどのように女性が登場し、その描かれ方にいかなる傾向があるのかを把握することである。そして第 2 に、1960 年代以来の社会変革の一環であったフェミニズム運動とその帰結としての現代家族のあり様が、1990 年代以降の歴史教科書の中でいかなる評価を与えられているのかを検討することである。

これらの作業を通して、ジェンダー間の差異と平等を説明する論理を把握し、さらにその背景に存在する社会の多様性と凝集性を説明する論理を析出していくことになる。

(2) アメリカの多文化教育の内容の検討は、教育社会学のみならずカリキュラム研究や文化社会学でも主題化されるようになったが、対象データの網羅性に留意した研究は、管見の限り英語圏においても見出しにくい。申請者の研究は、データとなる教材の恣意的な選定という問題の克服を意図しており、主要な教科書の改版に伴う経年変化を通時的検討によって把握するという方法を採用している。

また、2001 年以降のアメリカの社会状況には「右傾化」が指摘され、そのような観点からアメリカの教育動向を批判する研究も登場している。しかしアメリカ社会は一方では今もなお、社会の多文化化を不可避免的に経験し続けており、単純な保守主義への回帰はそもそも不可能な状態にある。そこでは「社会の多様性」と「社会統合の必要性」を同時に満たす思想が模索されつつあると言え、本研

究課題はその把握を目的としている点において、当該分野における独自性を主張できる。さらに教育学や社会学の分野を離れた議論においても、「文化戦争以後のアメリカ」がいかなる状態にあるのかを具体的に示す情報は必要とされており、本研究の遂行は教育学、社会学、アメリカ研究、多文化社会研究といった諸々の分野における議論の前進にも寄与する。

本研究課題にはまた、日本においても進捗しつつある社会の多文化化とそのもとでの教育内容の変容を、比較教育社会学的に考えるための有効な基盤を得るという意義もある。日本においても「ジェンダー問題と教育」に関する調査研究は積み重ねられており、またそれが政治問題化しているが、女性の地位向上とジェンダー間の新しい共生秩序の模索をいち早く経験しているアメリカ社会を対象として集中的な文献調査や取材を実施し、ジェンダー問題の変容とその克服策の系譜を整理する理論的インデックスを得ることは、この分野の研究を前進させる要素となり得る。

3. 研究の方法

(1) 本研究は大きく分けて2つの課題を設定し、それぞれの作業の方法は以下のものとなる。

〔課題Ⅰ〕1990年代以降のアメリカの歴史教科書における、女性史・フェミニズム運動・現代家族に関する内容をデータベース化し、先行研究の知見と比較分析する——歴史教科書のカリキュラム分析。

〔課題Ⅱ〕多文化教育の実践的手法の現状および多文化社会論の今日的動向を把握し分析する——書籍その他の資料の探索と分析。

これらの作業を進めるにあたって、2008年度には主として「データの収集と整理」を、2009年度には「分析と追加データの収集」を想定した。

(2) 〔課題Ⅰ〕についてはまず、以下の10点の歴史教科書を中心に、その他のものも含めて、1990年代以降に刊行された版を可能な限り多く入手する。これらは、教科書の自由採択が行われているアメリカの歴史教育現場で最も広範に、かつ長年版を重ねて使われている教科書である。

〈前期中等教育向け教科書〉

・ *American Nation* (P. Boyer et al., TX: Holt Rinehart)

・ *The American Nation* (J. W. Davidson et al., NJ: Prentice Hall)

〈後期中等教育向け教科書〉

・ *The American Pageant* (D. M. Kennedy et

al., MA: Houghton Mifflin)

・ *The Americans* (G. A. Danzer et al., IL: McDougal Littell)

・ *American Odyssey* (G. B. Nash et al., NY: Glencoe)

・ *A History of the United States* (D. J. Boorstin et al., NJ: Prentice Hall)
〈後期中等教育～高等教育教養向け教科書〉

・ *Making America* (C. Berkin et al., MA: Houghton Mifflin)

・ *Nation of Nations* (J. W. Davidson et al., NY: McGraw Hill)

・ *The American People* (G. Nash et al., NY: Pearson Longman)

・ *A People and a Nation* (M. B. Norton et al., MA: Houghton Mifflin)

次にこれらの教科書における情報を、カリキュラム分析の「ストーリーライン分析」に供するためにデータベース化する。個々の歴史教科書から「第二次世界大戦期の女性の働き」「ベティ・フリーダンの活動」「ERA（平等権憲法修正案）をめぐる論争」「妊娠中絶をめぐる社会的対立」「アメリカの現代家族」等についての記述を抜粋し、その知識内容の時系列的変化を確定する。これらの項目はChristine E. Sleeter & Carl A. Grant, *Making Choices for Multicultural Education: Five Approaches to Race, Class, and Gender* (NJ: John Wiley & Sons, 2006年)を初めとする先行諸研究の論点に合わせて設定された。

申請者はこれまでの研究の過程でも、1950年代から2000年代にかけて出版されたその他の教科書や副教材を100種余り入手し分析している。そこで得た知見を今回の分析の補助線とすることによって、1990年代以降の教育内容の全体状況を提示するとともに、1980年代以前の教育内容との変化を指摘し、社会状況の変化との対応を検討することが可能となる。

4. 研究成果

本研究は、文化戦争以降のアメリカ合衆国の歴史教育の内容を把握し、1960年代以降に女性が獲得した社会や家庭での新たな役割がそこにどのように表現されているのかを分析するものである。

(1) 2008年度は、研究計画に即して以下の2つの課題を設定して研究活動に取り組んだ。

①1980年代以降現在までの主要な歴史教科書の内容をデータベース化し、とくにバックラッシュ以降のジェンダー概念の扱いと、女性像・家族像の表現のされ方を分析する。②文化戦争以降の歴史教育の動向について、とくに「多様性を尊重する多文化主義思想」と

「社会の凝集性を重視する保守主義思想」との相克と止揚の観点から探索する。

①については、改版されつつ長期に亘り刊行され採択率も高いことを選択基準として40点の歴史教科書を収集し、「20世紀後半のフェミニズム運動」と「家族の変容」に関する記述の抜粋を、年代別に対比させる形でデータベース化した。このデータベースは2008年12月に研究代表者のウェブサイト(<http://homepage3.nifty.com/ubiquitous/postbacklash/index.htm>)で公開し、テキストの日本語への翻訳を進めた。1960年代以来の社会変革の一環であったフェミニズム運動とその帰結としての現代家族のあり様を、各年代の教科書がどのように評価しているのかという点から、アメリカ社会の統合の論理の変遷を辿った。

②については、書籍その他の資料の探索と分析を進めた。その成果の一部は、『アメリカ史研究』第31号に掲載された論文「歴史教科書におけるナショナルヒストリーの隘路と活路——日米の歴史教科書問題を事例として」で発表した。また第5回日本アメリカ史学会年次大会の大シンポジウム「世界史教育のなかのアメリカ史」において、報告「歴史教育の社会化機能について——日米の歴史教科書に通底するもの」を行った。

(2) 2009年度も、研究計画に即して以下の2つの課題を設定して研究活動に取り組んだ。①前年度にデータベース化した1980年代以降現在までの主要な歴史教科書の内容を分析する。とりわけバックラッシュ以降のジェンダー概念の扱いに注目しつつ、教育的知識としてのその概念の可能性について考察する。②文化戦争以降のアメリカの歴史教育の動向について、「多様性を尊重する多文化主義思想」と「社会の凝集性を重視する保守主義思想」との相克と止揚の観点から探索する。さらにその知見に照らして、日本においても進行しつつある社会の多文化化とそのもとの教育内容の変容を、比較教育社会学的に考えるための有効な基盤を得る。

①については、データベースをもとに内容の分析を進めた。その成果は、『共生教育学研究』第4巻に掲載された研究ノート「ポストバックラッシュのジェンダー概念にみる教育的知識としての可能性——多文化共生を促す教育的知識の探索」で発表した。〈特定の価値の擁護や、特定の価値に基づいた歴史像の再構築をするのではなく、価値が争われる点を提示することで、あるカテゴリに付与された社会的意味を吟味させる語り口〉が教育的知識において採用されていることの意義を析出した。

②については、書籍その他の資料の探索と分析を進めた。その成果は、筑波大学 IFERI

共同セミナー《共生をめぐる問題系の確認と展開》の「ネイションと教育」部会における報告「歴史教科書問題とその「克服」にみる〈ナショナルヒストリー〉の桎梏」で発表するとともに、研究誌『リスク社会化環境における共生社会論』『共生をめぐる問題系の確認と展開』等に掲載された諸論文で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ①岡本智周「ポストバックラッシュのジェンダー概念にみる教育的知識としての可能性——多文化共生を促す教育的知識の探索」『共生教育学研究』4、査読無、2010年、pp. 101-111.
- ②岡本智周「学校歴史教育における語り口の問題」『共生をめぐる問題系の確認と展開——2009年度 IFERI 共同セミナー』岡本智周・羽田野真帆編、筑波大学共生教育社会学研究室、査読無、2009年、pp. 53-58.
- ③岡本智周「異文化体験から共生という社会的行為へ——“体験”を考える」『教職研修』449、査読無、2009年、pp. 112-115.
- ④岡本智周「歴史教科書問題とその「克服」にみる〈ナショナルヒストリー〉の桎梏」『リスク社会化環境における共生社会論——問題系の確認と展開』リスク共有型共生社会研究会、査読無、2009年、pp. 12-36.
- ⑤ Tomochika Okamoto, “Reflexive Historiography in Postwar Japan’s World History Textbooks,” *Journal of Educational Research for Human Coexistence* 3, 査読無, 2008, pp. 1-13.
- ⑥岡本智周「歴史教科書におけるナショナルヒストリーの隘路と活路——日米の歴史教科書問題を事例として」『アメリカ史研究』31、査読有、2008年、pp. 38-55.

〔学会発表〕(計2件)

- ①岡本智周「歴史教科書問題とその「克服」にみる〈ナショナルヒストリー〉の桎梏」、筑波大学インターファカルティ教育研究イニシアティブ(IFERI)共同セミナー《共生をめぐる問題系の確認と展開》「ネイションと教育」部会、2009年7月4日、於・筑波大学.
- ②岡本智周「歴史教育の社会化機能について——日米の歴史教科書に通底するもの」、第5回日本アメリカ史学会年次大会・大シンポジウム「世界史教育のなかのアメリカ史」、2008年9月20日、於・東洋学園大学本郷キャンパス.

〔図書〕（計 1 件）

- ①岡本智周『歴史教科書にみるアメリカ——共生社会への道程』学文社、2008 年、全 126 頁.

〔その他〕

ホームページ

<http://homepage3.nifty.com/ubiquitous/postbacklash/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 智周 (OKAMOTO TOMOCHIKA)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科

・准教授

研究者番号：60318863